

年が改まって早2週間が過ぎ、わたしたちの生活も、現実に戻り、仕事に追われる日々となりました。今年こそはと、希望を抱いて迎えた新しい年ですが、年末から再びコロナ感染症が、今までにない速度で広がり、第6波の波がそこまで迫っているような不安が社会には漂っています。教会の典礼は降誕節から年間に入っていますが、今日の福音には、まだ、公現祭の余韻が残っています。

そんなわたしたちに、神は、今日、何を語ろうとしておられるのでしょうか。今日の朗読の中心となる福音は、よくご存じのカナの婚宴の話です。婚宴の席で葡萄酒がなくなった時に、イエスが母マリアの執り成しにより、水を葡萄酒に変えられたという話です。ヨハネは、これを「最初のしるし」として記しています。マタイやマルコ、ルカ、いわゆる共観福音書と呼ばれる福音書では、イエスが病気を癒されたこと、悪霊を追い出されたことを、最初の奇跡として記していますが、なぜ、ヨハネはカナでの出来事を、最初のしるしとされたのでしょうか。

婚宴の話は、イエスの説教にもたびたび出てきますが、第一朗読のイザヤの預言の中でも触れられているように、旧約聖書の中でも、預言者たちが、神と人々との深い交わり、また、来るべき終末の救いのたとえとして言及されています。人となられた神の子としてのイエスの生涯を記すにあたって、ヨハネは、イエスがもたらそうとされたことが、まさに、喜びにあふれた救いの到来であることを、カナの婚宴の話で示そうとされたのではないのでしょうか。

婚宴という、人間一生に一回しかない晴れがましい時に、肝心の葡萄酒が底をついてきます。もし、それが招待客に知れたら、新婚の夫婦は大恥をかき、結婚式は台無しになっていたでしょう。そこで、イエスの母マリアは、花婿たちが直面するであろう窮状をいち早く察知し、イエスに耳打ちします、「ぶどう酒がなくなりました」と。十字架に架けられたイエスが、弟子をわが子として母に託したことを、先取りするかのよう、母は、人々が直面する困難の解決をイエスに委ねます。

しかし、イエスは、一見無関心を装うかのように、「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません、」と答えます。「わたしの時」とは、イエスが迎えるべき受難と死、十字架の死を意味します。イエスがもたらす救いは、その苦しみと死を通してはじめて実現するものです。それでも、母の信頼は揺らぎません。「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と。イエスは、母の言葉を受けて、かめを水でいっぱいにし、それをぶどう酒に変え、窮状を乗り越えられます。

この出来事は、ただ一つの奇跡であるのではなく、イエスがまさになさろうとしておられる、救いの業、全体をあらわすしるしです。「水がめに水をいっぱい入れなさい」とイエスは言われます。それほどぶどう酒が必要だったのかわかりません。しかし、イエスのなさる業はいつも、人間の必要を超えるものです。パンの奇跡を思い出してください。パンを増やされた後、「残ったパンの屑で、12の籠がいっぱいになった、」とあります。また、サマリアの女との対話の中で、「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」と言われます。ヨハネ福音書の冒頭に、「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上にさらに、恵みを受けた」とヨハネは記します。

カナの奇跡が前もって語る、イエスがもたらされた、はかりしれない恵みの中に、わたしたちは生きています。この事実をしっかり受け止めましょう。わたしたちが生きる現実の中には、人間的に見て不都合なことが次々と起きてきます。しかし、結婚式での思いがけない場面に主が同席されたように、そうした現実の中に、主がともにいてくださり、思いもよらない解決への道を開いてくださることを心に刻みましょう。そして、その恵みに感謝し、その恵みを一層深く意識するだけでなく、それに生かされ、その喜びを出会う人々に伝えて行くことが出来るよう、祈りましょう。(S.T.)